

段差の底釣り

●寄せ・エサ持ち・バラケ性・重さがすべて◎のバラケエサ

(「段底」は単品でもOKだが、「もじり」を入れておくと練っても開きをキープできる)

バラケ① 段底600cc+もじり200cc+水200cc



●作り方/粉をボウルに入れ、水を注いで混ぜる一緒練り。エサ使いとしては持たせるように手水と押し練りが基本で、上手くいかないときは作り替えるのがベスト。

●集魚パワー最強のバラケエサ

(竿15尺ぐらいまでのタナに対応)

バラケ② ペレ道200cc+水200cc +スーパーD400cc+バラケマツハ200cc



●作り方/先に「ペレ道」を水で溶いてから残りの魅を入れかき混ぜる。練りを加えながら使うのがコツ。

「段底」ってどんなエサ?

狙ったタナへエサをもたせる重さとまとめやすさを備え、仕上がりはエサ付けもしやすく、エサ持ちの不安を感じない段底専用のバラケエサ。バラケ方が一定なので、バラケの抜け具合がウキの目盛でハッキリ確認できることも釣り人にとっては信頼できる点。手直しの幅も広く、粘らせたり、軟らかくしたりとタッチをさぐりやすい。

寄せ・エサ持ち・バラケ性・重さと今まで以上に4拍子揃った単品でも充分使えるエサだ。



●くわせエサ

くわせ①

特選わらび彩1分包
+水120cc



くわせ②

本グル50cc+水60cc



くわせ②

力玉大粒



●釣り方のコツ

段差の底釣りは、水温や気温の低下や混雑などで状況が渋いとき、釣果的にポツポツ程度で、アタリもそれほど続かないときに威力を発揮する釣り方だ。型にもよるが、枚数で30枚前後、目方で20kgを目安にこれを下回るときが段底の時合と言える。

时期的に風が吹く日が多くなるので、竿一杯のタナで釣るのが望ましい。ただし、同じ竿で並ぶようであれば、竿の長さを変えたり、ハリス段

差に変化を付け、エサの開きを変えてみる。この2点で同じ段差の底釣りでも釣果に差が出るが多い。

釣っていく上でのポイントは、ウキをしつかりなじませること。そして、バラケが抜け切るまでの力強いアタリにアワせていく。このアタリが出ないときは、エサ落ち付近の小さな力強いアタリに絞る。

また、バラケエサが抜けきつてからの誘いはかなり有効なので、積極的に誘っていいこう。誘い方は、竿を手前に引く、送る、上げる、送ると色々あるが、その日ごとにアタリが出るパターンがあるので、それを見つけることも重要である。



■基本セッティング

エサ打ち点を一定にするため、竿の長さは、水深に合わせるのが基本。目安はウキの位置が穂先からウキ1本分〜60cmの範囲になるようにしたい。ウキは、バラケエサを支えられることとストロークを活かすためトップが長いものがよく、素材はわずかな動きも伝えてくれるPCMクやグラスムクがおすすめだ。ミチイト・ハリスは極端な太仕掛けでなければ、一般的なものでよく、ハリもエサを持たせられる、アタリが出る大きさに合わせてサイズを決めたい。

●仕掛け図

竿●8〜21尺

ウキ●PCMクやグラスムクで足長

8〜10尺なら羽根寸9〜11cm
11〜13尺なら羽根寸11〜13cm
竿15尺前後なら羽根寸14〜15cm
竿18尺以上なら羽根寸15〜18cm

ミチイト●0.6〜0.8号

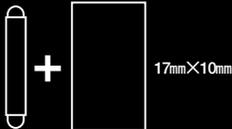
ハリス●上0.4号10〜20cm
下0.2〜0.3号50cm

ハリ●上5〜6号
下くわせタイプ2〜4号

●オモリ 実寸大

竿8〜10尺なら

絡み止めタングステンオモリ1gに
0.25mm厚の板オモリ17mm×10mm



竿18尺以上なら

絡み止めタングステンオモリ1gに
0.25mm厚の板オモリ17mm×35mm



竿11〜13尺なら

絡み止めタングステンオモリ1gに
0.25mm厚の板オモリ17mm×20mm



竿15尺前後なら

絡み止めタングステンオモリ1gに
0.25mm厚の板オモリ17mm×25mm



●エサの大きさ 実寸大

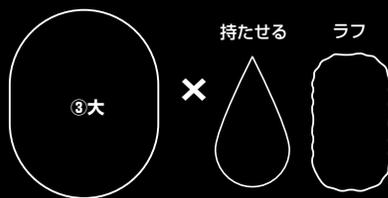
バラケ



バラケエサは、基準は1.5cmで小さくつけるときは1.2cm、大きくつけるときは2.5cm。これに、チモトを押さえて持たせるようにする、ラフ付けの組み合わせで対応する。

持たせる

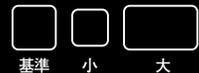
ラフ



くわせ

くわせエサは、ウドンなら6mm角を基準に小さめなら5mm角、大きめなら1cmとする。グルテンは7mmを基準に、小さめなら5mm、大きめなら1cmで丸く付けること。

ウドン



グルテン



ここがポイント①

アタリはあるのにヒットしないとき

まず考えられるのが、エサのバラけ過ぎだ。まず最初はエサを小さく付けてみる。このとき、エサは小さくなくてもタナまでしっかりもたせること。

次にそれでもさほど効果がないときは、エサのブレンドで対応する。開きを抑えるため、エサをまとめてくれるものや、粒子の細かいもの、重めのものなどを追いつけていく（「ダンゴの底釣り夏」、「バラケバイナダー」、「冬のバラケ」、「粘力」など）。これでもアタリはあるのにヒットしなければ、ハリス段差を詰めていく。

釣りに慣れてくると、これらの対応を同時にやってしまいがちだが、それは好結果とならないことが多く、ひとつずつ順番に対処していくことが、釣果をのばしていくコツだ。



ここがポイント②

アタリが減ってしまった、なくなってしまったとき

この原因もバラケエサがタナまで持っているなら、エサの開きすぎが考えられる。アタリがあってもヒットせず、それでも何の対処もしないで打ち続ければ、次第にアタリも減り、いずれはアタリすらなくなってしまふ。

細かい魅を足して硬くし、小さくハリ付けて、バラケを抑える。それと同時にハリスを伸ばしていき、ウキが動く、アタリが出る状態へ持っていく。また、力強く入るアタリに絞っていくことが大切で、余計な動きに手を出しているのは、必要以上にバラケを拡散させてしまふし、せっかく寄ったへら鮒を散らせてしまふ。

このように、自分で時合を壊していることも多く、それでアタリが減ったりなくなったりしていることも多いので、注意したい。渋い時合の釣りなので、1枚1枚を丁寧に確実に釣っていくことを心がけたい。

